



株式会社翻訳センター [証券コード:2483]

個人投資家向けIRセミナー 会社説明資料

2025年9月20日

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.

株式会社翻訳センターの二宮と申します。
本日はどうぞよろしくお願いいたします。

Table
of
Contents

- 会社概要
- 成長戦略
- 業績動向
- 成長イメージ・株主還元
- Appendix

本日は、当社の会社概要、成長戦略、直近の業績動向、成長イメージについて、ご説明します。

Section 1

- 会社概要
- 成長戦略
- 業績動向
- 成長イメージ・株主還元
- Appendix

それでは、まず会社概要について、ご説明します。

企業理念

産業技術翻訳を通して、国内・外資企業の国際活動をサポートし、
国際的な経済・文化交流に貢献する企業を目指す

経営ビジョン

すべての企業を世界につなぐ 言葉のコンシェルジュ

人と人とのコミュニケーションになくてはならないのが「言葉」です。国や言語が違っても「言葉」は世界の人々が理解し合うための重要なツールです。翻訳センターは、「言葉」でお客様を世界につなぎます。

会 社 名 株式会社 翻訳センター

本 社 所 在 地 大阪本社：大阪府大阪市中央区久太郎町4丁目1番3号
東京本社：東京都港区赤坂1丁目12番地32号

代 表 者 二宮 俊一郎

設 立 1986年4月

資 本 金 5億8,844万円(2025年3月末現在)

従 業 員 数 545人(2025年3月末現在) *連結

事 業 所 大阪、東京、名古屋

関 係 会 社 株式会社アイ・エス・エス

株式会社メディア総合研究所

株式会社FIPAS

株式会社バナシア

株式会社福山産業翻訳センター

ランゲージワン株式会社(持分法適用会社)

事 業 内 容 翻訳事業、通訳事業、派遣事業、
コンベンション事業、通訳者・翻訳者養成、
外国特許出願支援、メディカルライティング、
多言語コールセンター

当社では、経営ビジョンを「すべての企業を世界につなぐ 言葉のコンシェルジュ」と定め、外国語の総合サプライヤーとして、お客様のお役に立てることを目指して、日々努力しています。



*1 2025年3月期実績（翻訳事業以外も同様）

*2 コンベンション事業は2025年3月期より「その他」の事業に含めて報告する方法に変更したため、同事業の2025年3月期実績は「その他」に含めております。

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved. 5

事業構成のメインは翻訳事業です。翻訳事業の売上比率が最も大きく、75.9%を占めています。

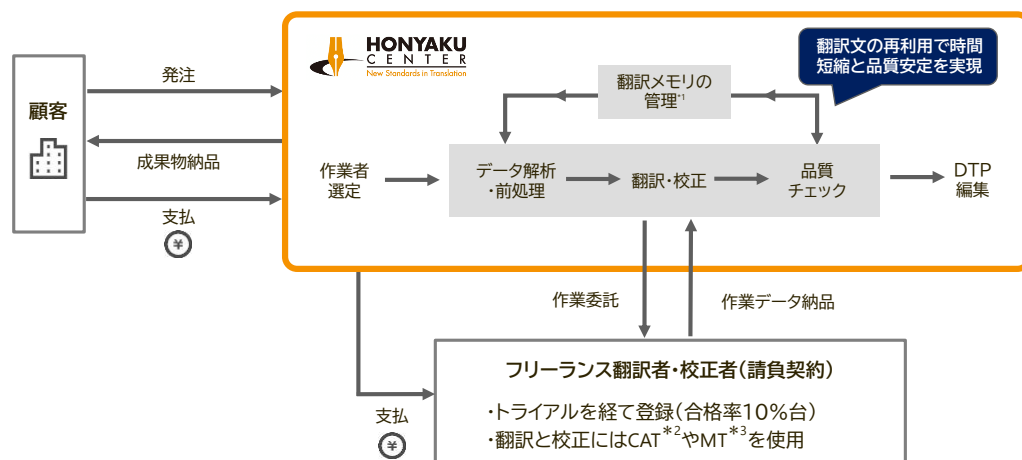
次に派遣事業の売上比率が約10%ありますが、派遣と申しましても、翻訳者の派遣に特化しています。一般的な事務派遣等はありません。

続いて、通訳事業です。派遣事業と混同されがちですが、通訳事業は請負契約による案件を扱っています。国際会議などでの同時通訳をはじめ、企業の経営会議や外国のITベンダーと日本企業との打ち合わせなど、さまざまな会議体への通訳者手配を行っています。

一方、派遣事業における通訳業務は、長期契約が基本です。短くても何ヶ月、通常は何年という単位で、お客様のオフィスに常駐して、業務を行います。そのため、通訳事業と派遣事業では、契約形態や業務内容、求められるスキルレベルに違いがあります。

そして、その他の事業として、特許の外国出願支援や通訳者・翻訳者の育成事業等を展開しています。

ビジネスモデル



*1 翻訳メモリ: (Translation Memory)とは過去に翻訳した文章を原文と訳文のペアでデータベース化したものであり、略して「TM」とも言う。

*2 CAT: 翻訳支援ツール (Computer-Assisted Translation | 翻訳者や校正者の作業を支援し、作業効率向上に導くソフトウェア)の略語

*3 MT: 機械翻訳 (machine translation | 人を介さず機械が行なう翻訳)の略語

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved. 6

続きまして、ビジネスモデルについて、ご説明します。

お客様からご発注をいただいた後、社内ではスライドのオレンジ枠で示された工程を担当します。

ここで重要な点として、翻訳作業そのものは基本的に社外のフリーランス翻訳者に依頼していることをあらかじめご理解いただきたいと思います。

社内で翻訳作業を行うケースもありますが、それは例外的なケースであり、通常は行っておりません。

その理由は、当社が取り扱う医薬品分野や特許分野において、専門領域が非常に細分化されているためです。すべての専門分野に対応できる翻訳者を社内で雇用するのは現実的ではないため、専門性の高いフリーランス翻訳者のネットワークを活用することで、質の高い翻訳を提供しています。

この仕組みは、翻訳業界では一般的な方法です。

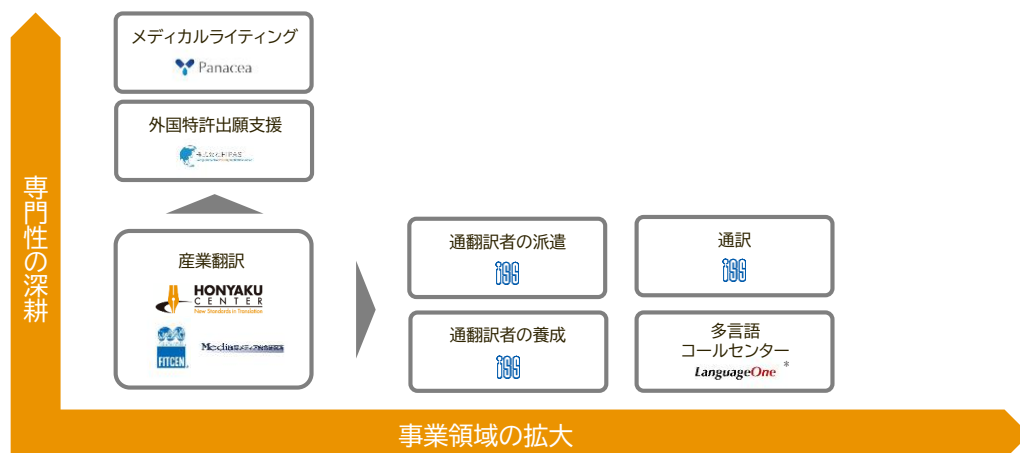
では、翻訳作業中に社内では何をしているのかというと、まず「データ解析・前処理」を行います。現在の翻訳業務は、翻訳支援ツールや管理システムと連携して進めるため、翻訳対象のデータをシステムに適した形に整える必要があります。

翻訳者による作業が完了した後は、社内で訳文の校正と品質チェックを行い、最終的にはDTP(デスクトップパブリッシング)によって仕上げ、納品します。

要するに、当社のビジネスモデルは、翻訳者が効率的に作業できる環境を社内で構築・提供することにあります。専門性の高い翻訳者が、当社が整えた環境の中で最大限のパフォーマンスを発揮できるよう支援する、それが、当社の価値提供の核となる仕組みです。

外国語サービスの総合サプライヤー

産業翻訳を軸に成長しながら、通訳・派遣やメディカルライティング、出願支援等の周辺事業にも進出。
外国語サービスの総合サプライヤーとして企業の国際活動を幅広く支援



* 持分法適用会社

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved. 7

先ほど会社概要の説明で「総合サプライヤー」という言葉を使いましたが、このスライドではその具体的な内容をご説明します。

まず、当社グループのコア事業は「産業翻訳」です。当社のほかに翻訳サービスを展開している会社にも、メディア総合研究所、福山産業翻訳センター（広島県福山市）があります。これらは、いずれも買収によりグループ入りした会社です。

次に、派遣、通訳、通訳者育成の各事業については、アイ・エス・エスという会社を買収し、運営しております。実は、日本国内には翻訳会社は数千社ある一方、通訳会社は10社にも満たないという非常に限られた市場です。そのような状況下で、当社が通訳事業に参入するには、ゼロからの立ち上げ（オーガニック成長）は困難であったため、アイ・エス・エスの買収によって事業展開を可能にしました。

さらに、通訳事業の下にある「多言語コールセンター」はランゲージワンという企業が運営しています。これは、外国語対応の電話通訳サービスで、例えば区役所の窓口で外国人が来られた際、職員がタブレットを通じてコールセンターに連絡すると、通訳者が間に入り、円滑なコミュニケーションを支援する仕組みです。対応言語は英語だけでなく、アジア圏を中心とした多言語に対応しており、日本に住む外国人の多様な言語ニーズに応えています。

そして、スライドの縦軸「専門性の深耕」として位置づけているのは、外国出願支援のFIPASとメディカルライティングのパナシアです。

医薬品分野の翻訳では、新薬の申請資料など、非常に専門性の高い原稿を扱います。例えば、日本からアメリカに薬を展開する場合はFDA、外国から日本に展開する場合はPMDAに臨床試験の結果を提出する必要があります。

このような文書を執筆（ライティング）するのがパナシアの役割です。執筆能力があるということは、翻訳能力も備えているということであり、翻訳とライティングを一体化したサービスを提供することで、ブランド力の向上とお客様への利便性を実現しています。

また、FIPASは、日本から外国に特許を出願する際に、外国の特許事務所との手続きを支援するサービスを提供しています。翻訳した出願用明細書をもとに、外国の特許事務所と連携し、特許権取得までをサポートしています。

このように、当社グループは翻訳・通訳・育成・ライティング・出願支援・多言語コールセンターまでを網羅する言語サービスの総合サプライヤーとして、専門性と多様性を兼ね備えた事業展開を行っています。



顧客ポートフォリオ



テクノロジーの活用

続きまして、当社グループの特長である「顧客ポートフォリオ」と「テクノロジーの活用」の2点をご紹介します。

顧客数 ^{*1} 3,300 社

年間受注件数 ^{*1} 49,200 件

医薬品・医療

- ・医薬品
- ・CRO
- ・医療機器
- ・大学、病院

[取引実績] ^{*2}
世界売上高
100億ドル超
26社の96%

特許

- ・特許事務所
- ・企業知財部
- ・特許調査会社

[取引実績] ^{*3}
出願件数上位
100事務所の
約70%

製造業

- ・自動車
- ・機械
- ・電機、電子
- ・エネルギー

非製造業

- ・情報、通信
- ・サービス
- ・インフラ

金融・保険・法律

- ・証券、銀行
- ・損保、生保
- ・法律事務所

官公庁・公社

- ・官公庁
- ・独立行政法人
- ・公益法人

^{*1} 2025年3月31日時点

^{*2} 2022年12月期(一部の日本企業は2023年3月期、豪CSLは2022年6月期)の世界売上高が100億ドルを超える企業26社をランキングして算出

^{*3} 知財ラボ「2022年特許事務所ランキング(<https://jp-ip.com/ranking-list/index/2/1>)」をもとに算出

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved. 9

まず「顧客ポートフォリオ」について、ご説明します。

当社は非常に多くのお客様とお付き合いがあり、前期実績では、年間稼働顧客数は約3,300社、受注件数は約5万件弱にのぼります。

医薬品・医療分野では、いわゆるメガファーマと呼ばれる大手製薬会社様とは、取引の規模にかかわらず、ほぼすべての企業と何らかの形で取引をいただいています。
また、製薬会社から開発業務を受託するCRO(開発業務受託機関)や、医療機器メーカーの皆様にも広くご利用いただいています。

特許分野においては、主に特許事務所と企業の知財部が顧客となっています。特許事務所の場合は翻訳業務のみをご利用いただくケースが多く、企業知財部については、翻訳のみのご依頼に加え、当社グループのFIPASを通じて、外国出願支援まで含めた一括サービスをご利用いただくこともあります。

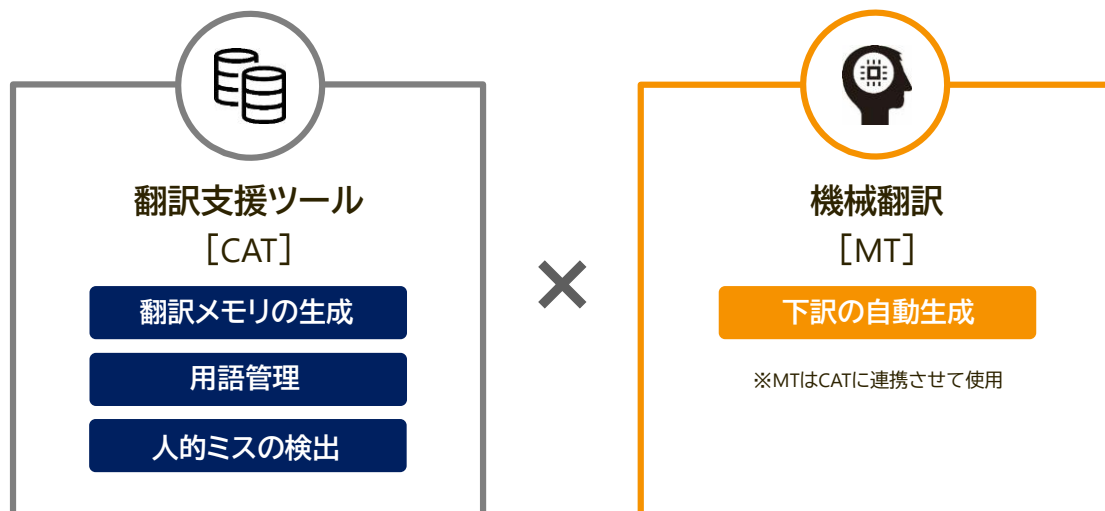
製造業では、自動車関連の企業様とのお取引が特に多く、自動車部品を含めた技術文書の翻訳などでご利用いただいています。

一方、非製造業では、IT系や情報通信系の企業が大きな領域を占めています。

金融・保険・法律分野では、主に外資系の保険会社様などにご利用いただいております、契約書や規約文書などの翻訳を提供しています。

最後に官庁・公社についてですが、こちらは案件の多くが入札形式であるため、都度、状況に応じて対応を判断しています。

このように、当社は業界を問わず幅広い顧客層を持ち、各分野に応じた専門性の高い翻訳サービスを提供しています。



ここからは「テクノロジーの積極活用」について、ご紹介したいと思います。
これは、当社が他の翻訳会社と差別化できる最大の要因であると考えています。

次のスライドでは、実際の画面の一部をご覧いただきますが、当社では「翻訳支援ツール」だけでなく、「機械翻訳(AI翻訳)」も活用して翻訳作業を行っています。

日本国内の翻訳会社の中でも、当社は非常に早い段階から機械翻訳の導入に取り組んできました。
「なぜ人間の仕事を奪うような機械翻訳を使うのか？」と疑問に思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、確かに、人間の翻訳とAI翻訳が競合するようには見えません。
しかし、当社が機械翻訳を導入している目的はただ一つ、業務の効率化です。

機械翻訳はあくまで下訳(ドラフト)として使用し、最終的には人間の翻訳者がその訳文をブラッシュアップして、人間が翻訳した文章と同等の品質に仕上げます。

当社は機械翻訳の販売代理も行っていますが、開発会社ではありません。
したがって、機械翻訳の販売による収益はほぼありません。
それでも機械翻訳を積極的に活用するのは、翻訳のスピードと生産性を高めるためです。

実は、当社は「機械翻訳」という言葉が一般化する以前、ルールベース型の機械翻訳が主流だった時代から、当社は開発ベンダーと連携して品質評価に取り組んできました。
当初は「使い物にならない」という評価でしたが、ニューラルネットワーク型の機械翻訳が登場してからは、下訳として十分に活用できる品質に達し、以降は積極的に導入を進めています。

このように、当社は人間とAIの協働による翻訳プロセスの最適化を追求しており、テクノロジーを活用することで、より高品質かつ迅速な翻訳サービスを提供しています。

テクノロジーの積極活用

黄色:用語集(TB)に訳語があることを指す

緑色・パープル色:翻訳メモリ(TM)、数字は一致率。
100%重複の場合はそのまま再利用できる

赤色:禁止用語。今回の翻訳で使用してはいけない用語を指す(誤訳の防止)

水色:機械翻訳(MT)による訳文
重複率が低い文章はMTが新たに翻訳。翻訳者が
訳出結果から最終的な訳文を決定する

CAT

1 Honyaku Center Inc. is listed on the TSE Standard Market Index at Tokyo Stock Exchange.

2 Honyaku Center

3 Honyaku Center Inc. is listed on the TSE Standard Market Index at Tokyo Stock Exchange.

4 Honyaku Center Inc. is listed on the TSE Standard Market Index at Tokyo Stock Exchange.

5 https://www.honyakucen.com/

6 (Securities code 2483)

7 About Honyaku Center

8

翻訳センターについて

株式会社翻訳センターは、医薬翻訳、特許翻訳、工業翻訳、金融・法務翻訳など専門分野の翻訳会社です。

英語翻訳をはじめ、中国語や多言語翻訳も、海外の翻訳会社との提携により高度で専門性の高い翻訳を提供しています。

メディカルライティング業務、翻訳者派遣、通訳者派遣、ゲーム翻訳・マンガ翻訳も承っております。

株式会社翻訳センターは、東京証券取引所スタンダード市場に株式を上場しております。

(決定した訳文が入る)



テクノロジーの積極活用により、作業時間を大幅に短縮

* 機械翻訳(MT)で生成された訳文を、プロの翻訳者が修正・編集(Post-Editing)して品質を高める翻訳手法

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved. 11

ここでは、当社における機械翻訳の具体的な活用方法についてご説明します。

スライドの薄オレンジ枠内が、翻訳支援ツール(CAT:Computer-Assisted Translation)の画面です。翻訳者の方々は、このような専用のプラットフォーム上で翻訳作業を行っており、Google翻訳のように単に文章を入力して訳文を得るといった、簡易的な作業ではありません。

画面の左側には原文が表示されており、一文ずつセルで区切られています。中央には翻訳者が作成した訳文が表示され、右側には「CAT」の下に翻訳メモリ(TM)、その右に「MT」として機械翻訳の訳文が並んでいます。

つまり、同じ英文に対し、翻訳メモリによる訳文と機械翻訳による訳文の2種類の候補が提示される仕組みです。翻訳メモリとは、過去の案件で使用された原文と訳文のペアをデータベースとして蓄積したもので、システムがそれを参照しながら、現在の翻訳対象文との一致率を算出します。

この一致率が高ければ、過去の訳文を再利用することで効率的に翻訳を進めることができます。一方、一致率が低い場合は、機械翻訳の訳文をベースに修正を加えていく方が効率的です。

当社では、この一致率のしきい値を75%と設定しています。75%以上であれば翻訳メモリの訳文を優先し、75%未満であれば機械翻訳の訳文を活用します。翻訳者の方々は、これらの候補を参考にしながら、一文一文を丁寧に修正していきます。もちろん、どちらの訳文も適切でないと判断した場合は、ゼロから翻訳を行います。

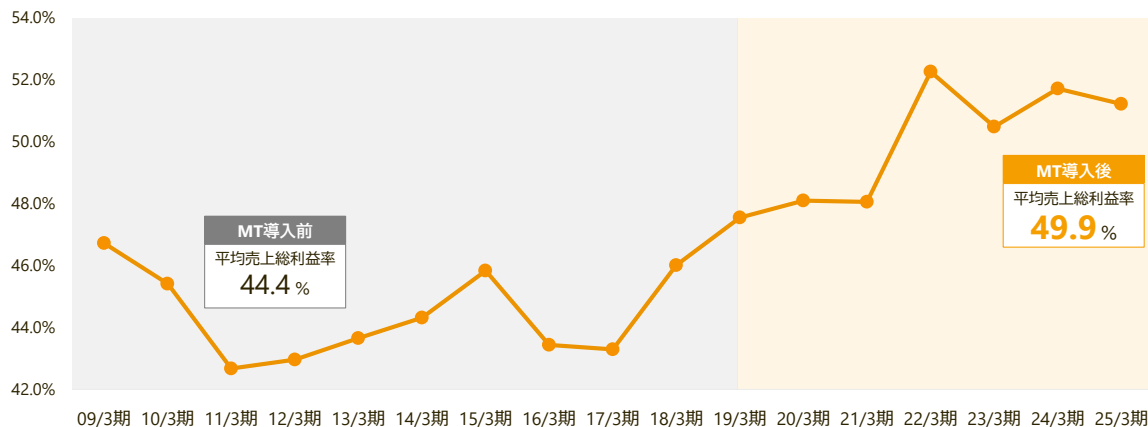
このようなプロセスを通じて、翻訳者の方々は単なる機械の補助ではなく、専門的な判断と修正を加えるプロフェッショナルな作業を行っています。

当社では継続的な案件が多く、同一製品やサービスに関する文書が時系列で繰り返し発生するため、翻訳メモリにを使った用語や表現を一貫して管理する仕組みが不可欠です。人間の目では追いきれないほどの分量と複雑さを、システムによって整理・管理し、効率的かつ高品質な翻訳サービスの提供を実現しています。

このような環境を整備し、翻訳者がその中で作業することで、従来の方法よりもはるかに効率的に翻訳を進めることができる——それが、当社の大きな強みのひとつです。

機械翻訳(MT)を下訳として活用することで、翻訳センター(単体)の売上総利益率が向上

翻訳センター(単体)の売上総利益率



Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved. 12

先ほどご説明した翻訳支援ツールや機械翻訳の活用は、すべて「効率化」を目的とした取り組みです。

当社では、翻訳者の方々がより快適に、かつ効率的に作業できる環境を整えることに注力しています。

翻訳支援ツールの導入や、機械翻訳の活用は、その環境づくりの一環です。

翻訳者の方々が作業しやすくなることで、翻訳の処理速度が向上し、結果として当社の売上総利益率の向上につながっています。

翻訳者の方々には、作業効率が上がる分、ワード単価を調整していただいています。

単価は下がるものの、処理量が増えるため、翻訳者の方々の収入は変わらないか、むしろ若干増える傾向にあります。一方、当社としては、売上原価の抑制という形で利益を確保できる構造となっています。

このような仕組みにより、当社の売上総利益率は安定的に右肩上がりで推移しており、これこそが「効率化」の取り組みがもたらした具体的な成果です。

Section 2

- 会社概要
- **成長戦略**
- 業績動向
- 成長イメージ・株主還元
- Appendix

続きまして、成長戦略について、ご説明します。

国内の翻訳・通訳市場
(2024年度) ^{*1}

2,905 億

当社の
市場シェア ^{*2}

3.8 %

^{*1}「語学ビジネス市場の実態と展望」(矢野経済研究所)

^{*2} 当社2025年3月期連結売上高(112億1,014万) を2024年度の翻訳・通訳市場規模(2,905億)で除して算出

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved. 14

国内の翻訳・通訳市場の規模は、現在約2,900億円と推定されています。

その中で、当社の売上を基に計算すると、現時点での市場シェアはまだ4%に満たない水準です。
この数字だけを見ると、当社の存在感は限定的に映るかもしれませんが、裏を返せば、国内市場においては
まだまだ成長の余地が大きいということでもあります。

実際、当社としては、今後もシェア拡大に向けて積極的に取り組んでいく方針です。

第6次中期経営計画 概要

■ 基本方針

New Standards in Translation

翻訳センターグループは、専門分野に精通した翻訳者・通訳者と日々蓄積される豊富な言語資産の活用を通じて、デジタル時代に対応した言語サービスを提供することで、顧客から最も信頼される言語サービスのパートナーになることを目指します。

■ 重点施策

- AI・データの活用による事業競争力の強化
- 業務効率化の推進
- 安定した収益基盤の確立

■ 連結業績目標(2028年3月期計画)

売上高 130 億円	営業利益 12 億円	当期純利益 8 億円	ROE 10 %以上
----------------------	----------------------	----------------------	----------------------

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved. 15

こちらが、現在進めている「第6次中期経営計画」の概要です。

重点施策として、「AI・データの活用による事業競争力の強化」「業務効率化の推進」「安定した収益基盤の確立」の3点に取り組んでいます。

2028年3月期の目標としまして、売上高が130億円、営業利益が12億円、純利益が8億円、ROE10%以上を掲げております。

AI・データの活用による事業競争力の強化

MT・LLMの活用による QCDの改善

当社の翻訳サービスの強み



翻訳者との信頼関係



自社専用エンジンを保有



専門文書への対応力

最新テクノロジーのフル活用

データドリブンによる 営業・マーケティングの強化



データを活用し、営業プロセスや
ターゲティングを最適化



サービス提供



顧客の状態に
沿ったアプローチ
やサービス提案

専門文書における競争優位性を確立

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved. 16

当社では、「AI・データ活用による事業競争力の強化」に向けて、現在2つの取り組みを進めています。

ひとつ目は、機械翻訳をはじめとするAI技術を活用し、翻訳業務のさらなる効率化を図ることです。近年では、LLM(大規模言語モデル)や生成AIなどの技術も登場しており、当社としてもこれらの新しい技術を積極的に取り込みながら、翻訳プロセスの最適化と生産性の向上を目指しています。

もうひとつは、データドリブンによる営業・マーケティングの強化です。

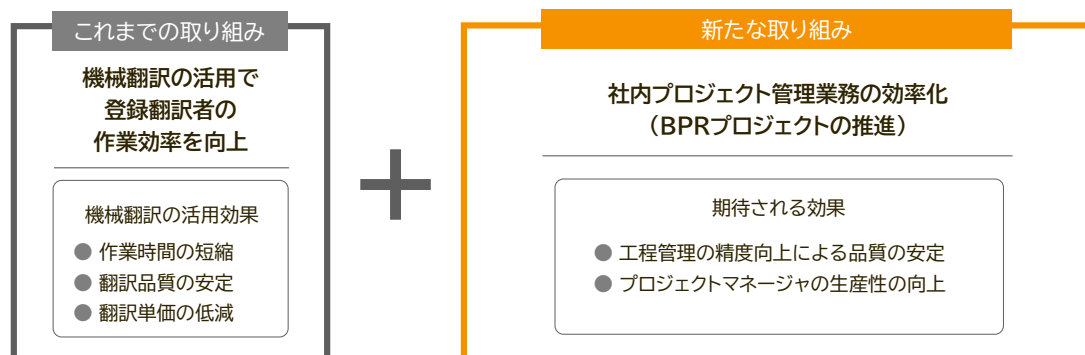
当社も当然ながらマーケティングや営業活動を行っていますが、これまでの活動を振り返ると、売上の大半を占める大手顧客に対しては安定した対応ができていた一方で、取引の少ないお客様、いわゆるロングテールのお客様に対する管理が十分とは言えませんでした。

そこで現在、これらのお客様にも末永くお付き合いいただけるよう、データに基づいた顧客管理の仕組みを再構築し、営業・マーケティング活動の質を高める取り組みを進めています。

このように、AI技術とデータ活用の両面から、事業の競争力を強化することが、当社の今後の成長戦略の重要な柱となっています。

業務効率化の推進

社内プロジェクト管理業務の効率化を推し進め、利益率の維持・向上を図る



Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved. 17

重点施策の2つ目は、「業務効率化の推進」です。
 ここで対象となるのは、翻訳者の方々ではなく、当社社内の業務です。

先ほどご紹介したように、翻訳者の方々が使用するシステムにデータを載せる作業や、訳文の校正、品質チェックなど、社内で行っている業務は多岐にわたります。

これらの業務プロセスを見直し、より効率的に運用していくために、現在当社ではBPR(Business Process Re-engineering: ビジネスプロセス・リエンジニアリング)の取り組みを進めています。

業務の質を維持しながら、無駄を省き、スピードと精度を高めることで、社内全体の生産性向上を図る——これが、当社が目指す業務効率化の方向性です。

安定した収益基盤の確立

資本効率を重視したグループ事業ポートフォリオの最適化

競争力の高い事業への
選択と集中

利益管理手法の
改善・強化



資本効率の向上と
成長期待の醸成

成長領域に対する投資

翻訳事業のシェア拡大

新しい成長事業の獲得



将来の収益源の育成

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved. 18

重点施策の3つ目は、「安定した収益基盤の確立」です。
これには、2つの具体的な取り組みがあります。

ひとつ目は、「資本効率を重視したグループ事業ポートフォリオの再構築」です。
当社は複数のグループ会社を有しており、それぞれに独自の事業を展開していますが、本社とグループ会社の間で機能が重複している部分も見受けられます。
そこで、グループ全体の事業構成を見直し、整理を進めることで、各社の収益性を高め、グループ全体としての資本効率を向上させていく方針です。

もうひとつは、「成長領域に対する投資」です。これは、翻訳事業のさらなるシェア拡大を目指すもので、もちろんオーガニックな成長も継続して追求していきますが、ご縁があればM&A(企業買収)も積極的に活用し、成長のスピードを加速させていきたいと考えています。

このように、既存事業の効率化と、新たな成長機会への投資の二軸で、安定した収益基盤の確立に取り組んでいます。

Section 3

- 会社概要
- 成長戦略
- **業績動向**
- 成長イメージ・株主還元
- Appendix

続きまして、直近の業績動向について、ご説明します。

売 上 高

2,669 百万円

前年同期比△1.7%

営 業 利 益

212 百万円

前年同期比+22.3%

経 常 利 益

219 百万円

前年同期比+24.8%

四半期純利益

142 百万円

前年同期比+26.8%

2026年3月期第1四半期の業績は、売上高が26億6,900万円、営業利益が2億1,200万円、経常利益が2億1,900万円、四半期純利益が1億4,200万円となりました。

売上高は若干の減収となりましたが、営業利益は前年同期比で22.3%増と、大きく伸ばすことができました。

(百万円)

	2025年3月期 1Q実績	2026年3月期 1Q実績	増減	増減率
売上高	2,715	2,669	△46	△1.7%
翻訳事業	2,047	2,009	△37	△1.8%
特許	749	786	36	4.9%
医薬	598	622	24	4.1%
工業・ローカライゼーション	500	420	△80	△16.1%
金融・法務	197	179	△18	△9.3%
派遣事業	289	288	△1	△0.4%
通訳事業	284	294	9	3.4%
その他	94	76	△17	△18.3%
売上原価	1,408	1,366	△42	△3.0%
売上総利益	1,307	1,303	△3	△0.3%
売上総利益率	48.1%	48.8%	0.7pt	—
販売管理費	1,133	1,090	△42	△3.7%
営業利益	173	212	38	22.3%
経常利益	175	219	43	24.8%
親会社株主に帰属する四半期純利益	112	142	30	26.8%

*その他は、コンパニオン事業、語学教育事業、外国特許出願支援事業で構成

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved. 21

2026年3月期第1四半期のなかから、主に事業別・分野別の売上動向について、ご説明します。

まず翻訳事業ですが、前年同期比で1.8%の減収となりました。

ただし、分野別に見ると、特許分野は堅調に推移しており、前年同期比で約5%の増収、医薬分野も4.1%の増収となっています。
これまで医薬分野については「回復に努めます」と申し上げてきましたが、ようやく増収基調に転じてきたことは、非常に前向きな変化だと捉えています。

一方で、工業・ローカライゼーション分野は前年同期比で16.1%の大幅な減収となりました。
この主な要因は、いわゆるトランプ関税の影響であり、自動車関連のお客様からは、「よし悪しではなく、見通しが立たないため動けない」という声が多く聞かれました。
先行きが不透明な状況下で、案件そのものが止まってしまっていることが、減収の要因となっています。

金融・法務分野も前年同期比で9.3%の減収となりました。
この分野には、一般企業の管理部門からの案件も含まれており、日本経済全体の停滞感が影響していると感じています。

派遣事業については、若干の減収となりましたが、もともと大きく伸びる性質の事業ではないため、横ばいで推移していれば十分と考えています。

通訳事業は前年同期比で3.4%の増収となりました。
昨期まではコロナ禍からのリバウンドによる高い成長率が続いていましたが、今年はそのリバウンドが収束すると見込んでおり、今回の増収率は通常運転に戻ってきたことの表れと捉えています。

売上総利益率については、売上総利益率が48.1%から48.8%へと上昇しており、生産性向上の取り組みが継続的に成果を上げています。
また、販売管理費についても、タイミングの良さもあり抑制できたことで、段階利益は大幅に伸びています。

とはいえ、まだ第1四半期の段階ですので、今後の四半期でしっかりと売上を取り戻していく必要があると考えています。

(百万円)

	2025年3月期 実績	2026年3月期 予想	増減	増減率
売上高	11,210	11,400	189	1.6%
翻訳事業	8,507	8,650	142	1.6%
特許	2,911	3,000	88	3.0%
医薬	2,694	2,840	145	5.3%
工業・ローカライゼーション	2,280	2,140	△140	△6.1%
金融・法務	619	670	50	8.0%
派遣事業	1,175	1,180	4	0.3%
通訳事業	1,187	1,250	62	5.3%
その他	340	320	△20	△5.9%
売上原価	5,895	6,050	154	2.6%
売上総利益	5,314	5,450	135	2.5%
売上総利益率	47.4%	47.8%	0.4pt	—
販売管理費	4,424	4,550	125	2.8%
営業利益	890	900	9	1.0%
経常利益	905	920	14	1.5%
親会社株主に帰属する当期純利益	723	630	△93	△12.9%

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved. 22

こちらが2026年3月期の通期予想です。

工業・ローカライゼーション分野では、期初の段階から減収を見込んだ計画を立てていましたが、第1四半期においては、減収幅が想定を上回る状況となっています。
特に自動車関連の需要停滞が影響しており、見通しの不透明さが案件の停滞につながっていると考えています。

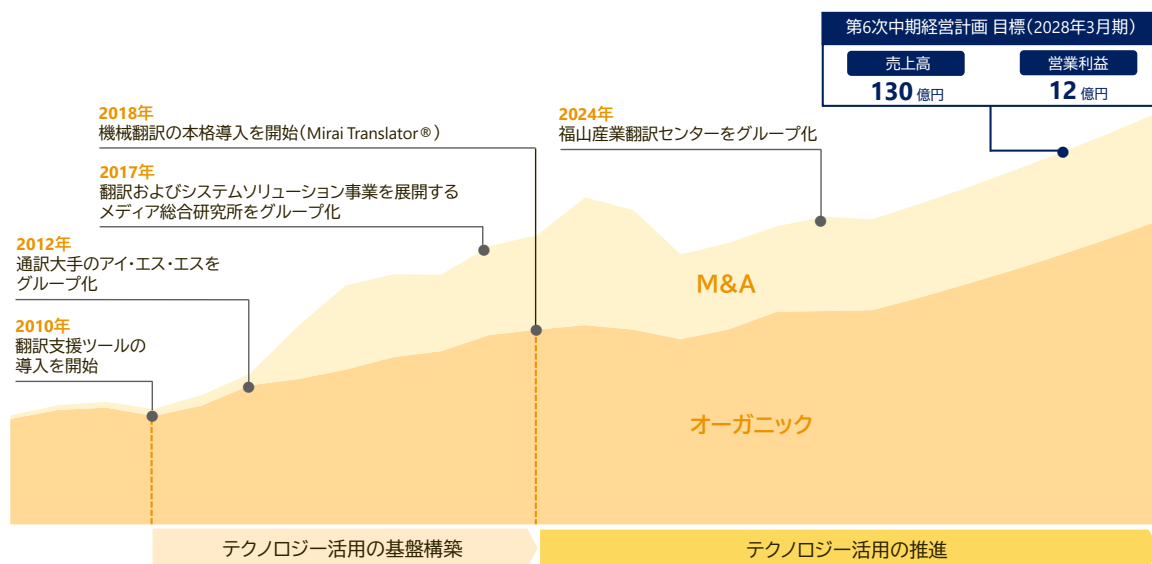
一方、金融・法務分野においては、プライム企業へのIR資料の日英同時開示が義務化されていることから、そのニーズに期待を寄せ、前期比8.0%の増収計画を立てています。
現時点では、IR関連の受注は堅調に推移していますが、他の領域が低調であるため、分野全体としての売上をどう取り戻すかが今後の課題です。

このように、分野ごとに明暗が分かれている状況ではありますが、期を通じて、計画とのギャップを埋めるべく、柔軟かつ戦略的に対応していく必要があると考えています。

Section 4

- 会社概要
- 成長戦略
- 業績動向
- 成長イメージ・株主還元
- Appendix

最後に、成長イメージと株主還元について、ご説明します。



当社の成長イメージとしては、基本的に既存事業をベースとしたオーガニック成長が中心となります。

特に、テクノロジーの活用によって生産性と収益性を高めていくことが、利益に直結する最も重要な要素であると考えています。

加えて、もう一つの重要な課題が市場シェアの向上です。

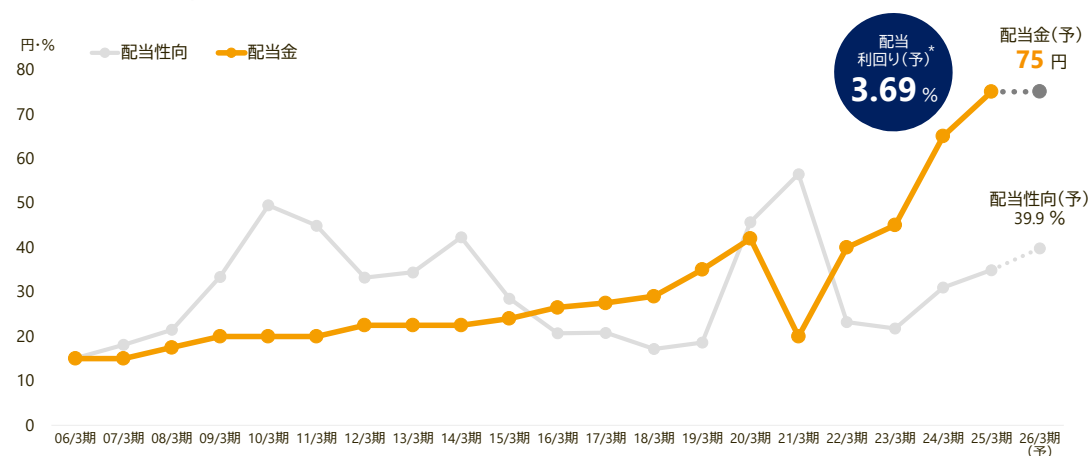
当社はこれまでに、アイ・エス・エスや福山産業翻訳センターなど、同業あるいは近接領域の会社を買収してきました。

今後も、ご縁があれば積極的にM&Aを活用し、市場シェアの拡大を図っていきたいと考えています。

そして、繰り返しになりますが、2028年3月期には売上高130億円、営業利益12億円の達成を目標に掲げており、現在その実現に向けた取り組みを進めているところです。

株主還元

2024年3月に配当方針を変更し、配当性向の目標を35%に制定。26/3期の配当は前期を据え置き、75円/株を予想(配当性向39.9%)



*1 2025年9月17日終値2,030円を基に当社にて算出

*2 2013年4月1日付で普通株式1株につき100株の株式分割を、また2018年4月1日付で普通株式1株につき2株の株式分割を実施しております。
上記グラフでは当該株式分割に伴う影響を加味し、適正修正を行った場合の1株当たりの指標の推移を記載しています。

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved. 25

最後に、株主還元についてご説明します。

当社は2024年3月に配当方針の変更を行い、配当性向の目標を35%と決めました。
2026年3月期の配当は、前期と同額の1株あたり75円を予定しており、配当性向は約39.9%となる見込みです。

当社はこれまで、安定的な増配を基本方針として掲げており、利益の増減にかかわらず、継続的に配当を実施してまいりました。
2021年3月期にはコロナの影響により一時的に減配となりましたが、その後は以前の水準に戻し、以降は増配を継続しています。

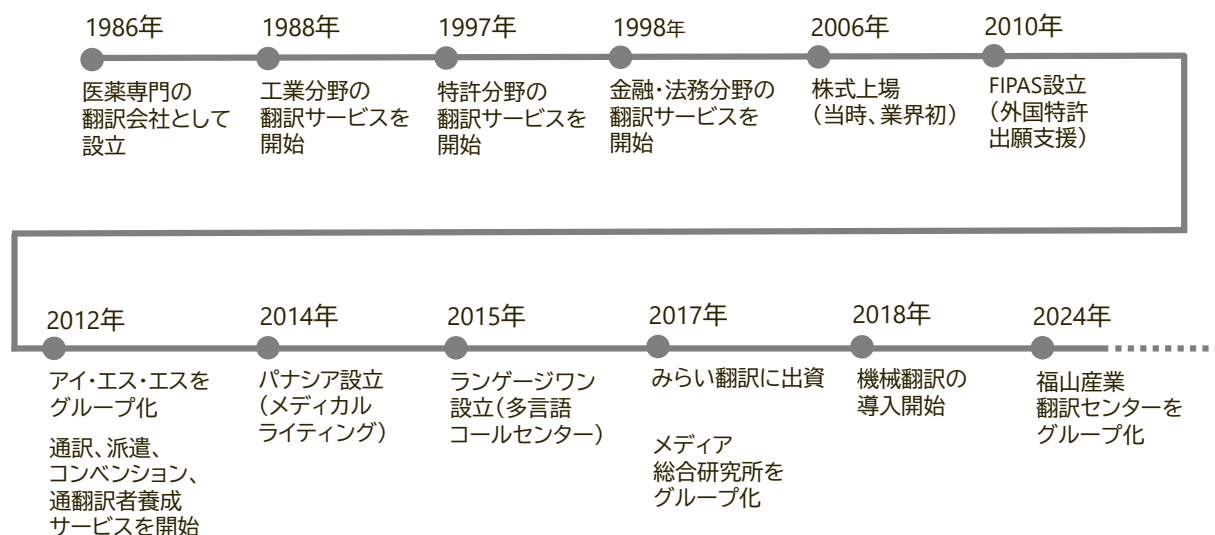
今後も、株主の皆さまへの還元を重視しながら、増配基調を維持できるよう、利益の確保に努めてまいります。

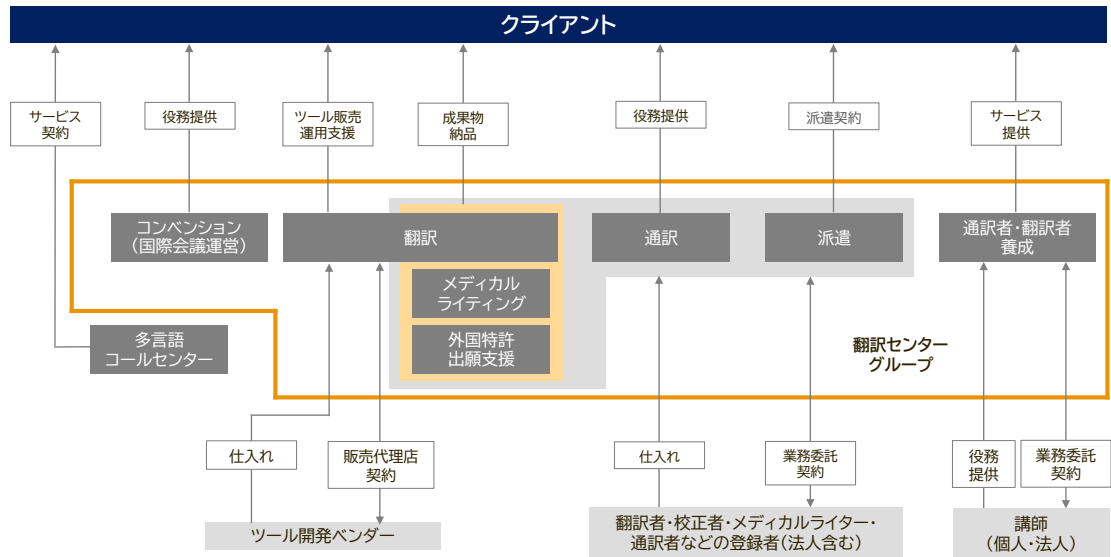
以上で、私からのご説明はすべてとなります。
本日はご清聴いただき、ありがとうございました。

Section 5

- 会社概要
- 成長戦略
- 業績動向
- 成長イメージ・株主還元
- Appendix

沿革





(百万円)

	2020/3期	2021/3期	2022/3期	2023/3期	2024/3期	2025/3期
売上高	11,550	9,910	10,337	10,947	11,303	11,210
経常利益	822	465	841	960	938	905
親会社株主に帰属する当期純利益	304	117	573	686	711	723
資本金	588	588	588	588	588	588
発行済株式総数(株)	3,369,000	3,369,000	3,369,000	3,369,000	3,369,000	3,369,000
純資産額	4,545	4,524	5,090	5,672	6,250	6,760
総資産額	6,222	6,295	7,172	7,486	8,326	8,836
自己資本比率(%)	73.0	71.8	70.9	75.7	75.0	76.5
売上高経常利益率(%)	7.0	4.7	8.1	8.7	8.2	8.0
連結従業員数(人)	522	509	520	521	562	545
登録者数(人)	3,030	3,249	2,681	2,815	2,866	2,911

* 翻訳センター単体

(百万円)

	2020/3期	2021/3期	2022/3期	2023/3期	2024/3期	2025/3期
売上高	11,550	9,910	10,337	10,947	11,303	11,210
翻訳事業	8,112	7,520	7,828	8,457	8,458	8,507
特許	2,258	2,100	2,316	2,708	2,902	2,911
医薬	2,749	2,875	2,904	2,796	2,605	2,694
工業・ローカライゼーション	2,472	2,038	2,028	2,376	2,368	2,280
金融・法務	632	505	580	575	582	619
派遣事業	1,200	1,228	1,212	1,119	1,174	1,175
通訳事業	1,022	477	655	854	1,095	1,187
その他	432	385	420	365	342	340
コンベンション事業	782	298	220	152	233	
売上原価	6,625	5,536	5,429	5,860	5,990	5,895
売上総利益	4,925	4,373	4,907	5,087	5,313	5,314
売上総利益率	42.6%	44.1%	47.4%	46.4%	47.0%	47.4%
販売管理費	4,111	3,955	4,096	4,159	4,410	4,424
営業利益	813	418	811	928	902	890
経常利益	822	465	841	960	938	905
親会社株主に帰属する当期純利益	304	117	573	686	711	723

(百万円)

	2020/3期	2021/3期	2022/3期	2023/3期	2024/3期	2025/3期
資産の部						
流動資産	5,213	5,515	6,311	6,611	7,289	7,667
固定資産	1,009	780	861	875	1,036	1,169
資産合計	6,222	6,295	7,172	7,486	8,326	8,836
負債の部						
流動負債	1,503	1,595	1,891	1,618	1,853	1,848
固定負債	173	175	190	195	221	227
負債合計	1,676	1,770	2,081	1,813	2,075	2,075
純資産の部						
株主資本	4,531	4,514	5,068	5,630	6,203	6,724
その他の包括利益累計額	13	10	22	42	47	36
純資産合計	4,545	4,524	5,090	5,672	6,250	6,760
負債純資産合計	6,222	6,295	7,172	7,486	8,326	8,836

本資料には、当社に関する業績や見通し、将来に関する計画、経営目標などに関する情報が含まれています。
これらは資料作成時点での想定に基づくものであり、これら情報が正確である保証はありません。
また開示規則により求められる場合を除き、本資料に記載の情報は予告なしに変更されることがあります。

お問い合わせ先

株式会社翻訳センター 経営企画室

E-mail

ir@honyakuctr.co.jp

IRサイト

<https://www.honyakuctr.com/ir/>